

レクリエーション、その他に使用しているが、乗りごこちもよく、今までのベット上の生活よりさらに、行動範囲も広くなり、たいへん喜ばれている。(写真3)

今後も、さらにB氏に適した車椅子を、介助者が介助しやすい車椅子を、工夫していきたい。

14. PMD 症児 (者) の履き物の工夫

国立療養所宇多野病院

藤 木 るり子

PMD 症の障害度が、進行するに伴い、靴をはく事を煩わしく感じたり、材質や型の不適合から、素足による歩行が多くなるなど患児 (者) の安全性や行動範囲に、極めて密接な関連がある事が、日常患児 (者) を観察する中でわかった。

独立歩行から、車椅子使用の生活に移行する時期の不安定な歩行状況をより安全で、快適なものとし、行動範囲を拡げ、精神面においても好ましい影響を与えることを目的とした。

まず従来着用靴、その他の履き物の重量材質などについて比較検討してみた。その結果、従来の物は、PMD 症児 (者) のはき物として不適当な点が多く、患児 (者) の意見も含め、次のような条件を出した。重量は進行に伴う筋力低下を考慮し、より軽い物であること、底の材質は滑りにくく、しかも足運びが、スムーズに出来るもの、側面と甲の部分は、通気性と保温力に富むもの、型は、患児 (者) 個々の足との密着度が高く、着脱が容易なものなどの条件がわかった。

次に歩行の特徴をより詳しく知るため、足底部と床との接触面について、当院入院患児障害度3度～4度の7名を対象に、静止した時と、歩行時の足型を採取し、比較してみた。

7例中5例が、静止時より、歩行時のかかとの幅が狭く、尖足による歩行を示し、また歩行時足運びがスムーズにできず、指先を引きずった跡が見られた。以上の特徴が、より顕著に現れた症例について、適当な履き物を試作、検討してみた。

今回は、洋式トイレカバーの保温性に着目し、これを利用して改良を試みた。まず、足底部の滑り止めとして必要な部分に、ゴムを付けて着用した結果、従来の靴より歩行しやすいが、長時間の歩行には、弾力性に欠けるため、疲労するとの訴えがあり、次に、足底部の床面に接する部分に、薄いスポンジをはって見た。これも歩行状態は良好だったが、長い間使用すると、汚れにより、滑り止めの効果が減少し、それに加え、前の物と同様、着脱困難という欠点もあった。そこで甲の部分から上部にかけてファスナーを取り付け、開閉式にし、着脱容易にして疲労感を緩和するため、

内底に、スポンジをはり、床との接触面には、手芸用の滑り止め剤(ハマナカ・ストップル)を付けた。

これらの改良により、前述の条件に沿った履き物が出来、患児(者)の歩行状況は、以前より改善された。

しかし、これらは、防水性に欠けるため、室外の使用に耐えないなど、検討の余地が残されている。

今迄の履き物に対する既成の概念に、とらわれることなく、幅広い分野に眼を向け、有効な材料を使用して、歩行不能となった患児(者)の保温を目的とした履き物も含め、今後も試作、検討を重ねたい。

15. 洋式腰かけ便器えの立ち上り装置の試作研究

国立療養所松江病院

三 島 昌 中 島 敏 夫

PMD患者では、登はん性起立、坐位からの起立、腰かけからの起立が順次困難更には不能となる。

腰かけ便器からの起立が不能となる時期から、普通より坐の高い腰かけからであれば、支持物につかまっても介助なしで(以下自力という)起立ができる時期までの間、自力で排泄することができれば、患者にとって幸せであると考えられる。

そこで、患者が腰かける便坐の高さを、患者自身の操作によって自由にセットできる装置を試作した。以下図1、写真1及び2を参照されたい。

DC16Vプリントモーター(①)の回転は送りねぢ(④)に伝えられる。この送りねぢには雌ねぢ(⑥)が組合わされ、送りねぢの回転にしたがって雌ねぢは上下に移動する(モーターの正回転によって上昇し、逆回転によって下降する)。この雌ねぢに便坐取付用金具は上下案内用支柱(②)とベアリングによって組合わせられる。便坐(⑤)はベニア板(⑦)を用いて便坐取付用金具に取りつけられる。モーターの始動及び便坐が自動的に止まる高さのセットは、リレースイッチを用いることによって、極めて弱い筋力でも操作できる。またモーターの回転数にしたがって便坐の昇降の速度は、あらかじめ抵抗器を用いて適当にセットされる。

患者はまず、便坐の高さについて、自分が自力でそこに腰かけたり、そこから起立できるところにセットする。腰かける。モーターを逆回転にセットする。モーターONボタンを押すと便坐

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

PMD 症の障害度が、進行するに伴い、靴をはく事を煩わしく感じたり、材質や型の不適合から、素足による歩行が多くなるなど患児(者)の安全性や行動範囲に、極めて密接な関連がある事が、日常患児(者)を観察する中でわかった。

独立歩行から、車椅子使用の生活に移行する時期の不安定な歩行状況をより安全で、快適なものとし、行動範囲を拡げ、精神面においても好ましい影響を与えることを目的とした。

まず従来着用靴、その他の履き物の重量材質などについて比較検討してみた。その結果、従来の物は、PMD 症児(者)のはき物として不適當な点が多く、患児(者)の意見も含め、次のような条件を出した。重量は進行に伴う筋力低下を考慮し、より軽い物であること、底の材質は滑りにくく、しかも足運びが、スムーズに出来るもの、側面と甲の部分は、通気性と保温力に富むもの、型は、患児(者)個々の足との密着度が高く、着脱が容易なものなどの条件がわかった。